

令和8年度 名古屋市教育研究員研究計画書 6番

社会参画する力を養う社会科学学習

名古屋市立相生小学校教諭 大 口 諒

I 研究のねらい

私が考える「社会参画する力」とは、社会に提案するために、社会課題を自分事として捉え、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げる力である。この力を育成することは、子どもが社会の一員である自覚をもつ上で重要である。社会課題は、国籍による対立、地域の問題など多岐にわたり、これらに立ち向かうためには、社会参画する力が必要不可欠である。しかし、こども家庭庁の調査(2023)や日本財団の18歳の意識調査(2024)によると、「問題の解決に関与したい」「自らの行動で国や社会を変えられる」という項目において肯定的な回答が低水準であり、諸外国と比較して著しく低いという結果であった。これは社会課題が自分とは関係のないものとして捉えたり、行動しても社会は変わらないと感じたりしていることが一因だと考えられる。したがって、次世代を担う子どもたちの社会参画する力を高めることは、今後、一層求められる課題だといえるだろう。

中教審が次期学習指導要領に向けて示した論点整理には、「他者と一緒に生き、課題を解決していくための力が必要となる」とある。また令和5年4月には「こども基本法」が施行され、「子どもが意見を表明する機会や多様な社会的活動に参画する機会を確保すること」が明記され、制度的にも社会参画を促す方向性が示されている。唐木(2026)は、社会参画意識を育てる公民授業として次の4つの手立てを提言している【資料1】。また、今日の社会科の問題解決的な学習が抱える課題として、問題が自分事にならないまま学習が進んでしまうことや、子どもの社会参画が保証されていないことという課題をあげた。さらに、社会参画を促すために、ただ提案するだけでなく、提案の中身と根拠を子どもが相互に吟味し、練り上げたものを提案することで、社会の一員としての自覚を高めることにつながれると述べている。これは一元的な解決策でなく、自分の考えを十分吟味【資料1 社会参画意識を育てる公民授業の手立て】して、多角的な解決策を考える必要性があることを示している。小学校学習指導要領社会編における、「多角的に考える」とは、複数の立場や意見を踏まえて考えることと定義されている。上記の課題を解決するためにも、社会参画する力を養う授業を行うことには意義があると考ええる。

①	単元を貫く問いを確保し、問題解決的な学習である
②	身近な地域課題を教材として取り上げ当事者意識をもたせ、多角的に考える
③	社会的課題の解決策を提案させたり、政策提案をパフォーマンス課題として設定させたりする
④	外部人材を活用し、学校や教室を社会に開く

以上を踏まえて、社会課題を自分事として捉え、複数の立場の考えを踏まえた多角的な解決策を練り上げることで社会参画する力を高めることができると考えた。

II 研究の方法

1 研究の対象 名古屋市立相生小学校 第6学年 2組 25人

2 基本的な考え方

社会参画する力を養うために「つかむ」「調べる」「まとめる」「いかす」の学習段階を設けた上で、唐木の「社会参画意識を育てる公民授業」の①～④を位置づけて実践する。まず、子どもに身近なことを教材に取り上げ、誰にとって影響があるのかを考えることで、社会課題に対して興味や関心を高める。次に、その課題と関わりがある人物を外部人材として取り上げ、話を聞く。その上で、誰にとって影響があるのかを改めて考えることで、自分と社会課題との関係を認識することができ、社会課

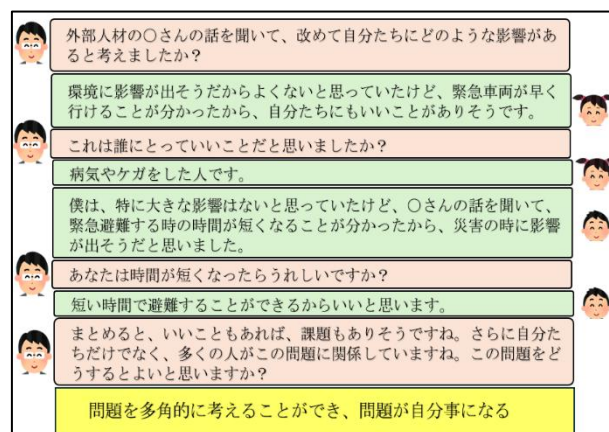
題を自分事として捉えることができる。さらに、その人から「〇〇について解決策を考えて提案してほしい」というパフォーマンス課題が提示されることで、より自分事として捉え、追究や提案の必然性をもつことができるようにする。そして、調べたことを基に考えた解決策を、単元の導入で出会った外部人材に提案し、フィードバックをもらう。最後に、これからどのように社会と関わっていきたいかを考える。

(1) 社会課題を自分事として捉えるための「つかむ」段階の工夫

社会課題が自分たちや周りの人に影響があることを捉えることで、自分との関係を認識することができ、社会課題が自分事になると考える。そこで、社会課題と出合う「つかむ」段階で以下のプロセスを踏んでいく。

まず、子どもに身近なことを教材として取り上げ、子どもが、社会課題に出合う。その後、「誰にとって、どのような影響がありそうですか？」という教師の問い掛けに対して、起こりうる影響を考える。次に、小グループを作り、自分が考えたこととその理由を伝える。最後にどのような影響があるかを学級で共有することで、自分たちに起こりうる問題だと捉えることができる。

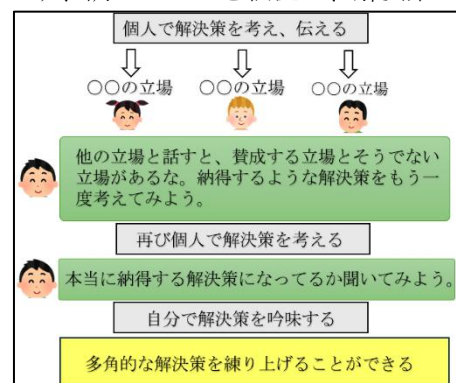
社会課題を認識した上で、その課題と関わる外部人材に出会う。そこで、話を聞き問題に対する学びを深める。その後、自分たちで捉えた問題と外部人材から話を聞いたことで明らかになった問題の類似点や相違点を見付け、改めてどの立場にとって、どのような影響があるのかを学級で共有する。そして、教師が問い返しをしながらどの立場にとって、どのような影響が起こりうるのかについて学級で対話をする。【資料2】。このように、自分たちを含む様々な立場の人に起こりうる影響が明確になることで、社会課題を自分事として捉えることができると考えた。



【資料2 予想される対話の例】

(2) 複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げるための対話活動

複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げるには、自分の解決策が複数の立場にとって納得できるかどうかを吟味することが必要である。また、対話を通して、自分では考えられなかったことに気づき、多角的な思考を促すことにつながる。そこで、まず、調べたことを根拠に、解決策とその理由を個人で考える。次に、以下の二つに分かれて対話活動を行う。④自分の解決策が、他の立場にとってどう思われるのかを聞く側⑤社会課題に関わる立場になりきり答える側とする。その後、役割を交代し、同じことを行う。活動を通して、自分の解決策に賛成する立場とそうでない立場があることに気づき、多角的な解決策を考えようとする。そして、再び解決策を個人で考え、考えた解決策が本当に複数の立場にとって納得できるか自分で解決策を吟味する。そして、必要に応じて解決策を考え直す。こうすることで、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げることができると考えた【資料3】。



【資料3 多角的な解決策を練り上げる過程】

このように、社会課題を自分事として捉え、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げることで、自分も社会の一員であることを自覚することにつながり、その結果、社会参画する力を養うことができると考えた。

3 6月実践「市民の願いを実現する政治 - 弥富相生山線をどうするとよいのか - 」

10月実践「日本とつながりの深い国々 - アジア・アジアパラ競技大会を通じて - 」における学習展開

単元と目標	単元「市民の願いを実現する政治 - 弥富相生山線をどうするとよいのか - 」 (10 時間完了) 【実践のねらい】 身近な地域の事例を通して、住民の願いを実現するためには、議会を通して自分たちの声を政治に届けることや、議会の働きについて理解するとともに、住民の願いには様々な立場があり、それらの願いを実現するためには、どのようにするとよいのか考えることができる。	単元「日本とつながりの深い国々 - アジア・アジアパラ競技大会を通じて - 」 (10 時間完了) 【実践のねらい】 身近な地域で開催された世界的大会を通して、世界には様々な国があり、それぞれの国で歴史や言語、くらしなどの文化が大きく異なっていることを理解するとともに、様々な立場（国）の人が平和に過ごしていくためには、どのようにするとよいのか考えることができる。
段階	主な学習活動（丸数字は時間）	
つかむ	① 弥富相生山線に関係する身近な地域の写真や事業の歴史や費用などから疑問をもち、自分たちへの影響を考える。 ② 外部人材である、名古屋市役所の道路建設課の方とオンラインで出会い、弥富相生山線の概要を知る。 ③ 自分たちで考えた影響と外部人材から聞いた話から分かった影響の類似点・相違点を探し、改めて自分たちへの影響を考え、外部人材の A さんからパフォーマンス課題を提示してもらう。 【検証場面 1】 【パフォーマンス課題】 弥富相生山線について地域の人が納得するためには、どうするとよいのか解決策を考えて、私に提案してください。 ④ パフォーマンス課題を追究する視点を設定し、学習計画を立てる。 <視点> 市議会の仕組み、税金の使い方、立場（住民・通したい人・通したくない人）	① 校外学習でアジア大会に行ったことを想起させ、なぜアジア大会が行われているのか、平和への日本の役割を考え、自分たちへの影響を考える。 ② 外部人材である、名古屋市や県庁で勤める〇〇さんに来ていただき、アジアパラ大会の概要について知る。 ③ 自分たちで考えた影響と外部人材から聞いた話から分かった影響の類似点・相違点を探し、改めて自分たちへの影響を考え、外部人材の B さんからパフォーマンス課題を提示してもらう。 【検証場面 1】 【パフォーマンス課題】 あなたは日本政府の大臣です。アジア・アジアパラ競技大会をきっかけに日本とアジアの国々がずっと仲良くしていくためにはどうするとよいと考えますか？日本とアジアの国の違いから解決策を考えて、私に提案してください。 ④ パフォーマンス課題を追究する視点を設定し、学習計画を立てる。 <視点> 大会の詳しい概要・参加した国々の文化や歴史
調べる	⑤～⑦ 学習計画に沿って視点ごとに調べる。	⑤～⑦ 学習計画に沿って視点ごとに調べる。
まとめる	⑧⑨ 個人で解決策を考え、異なる立場の人と対話をして、複数の立場を踏まえた解決策を考える。 【検証場面 2】	⑧⑨ 個人で解決策を考え、異なる立場の人と対話をして、複数の立場を踏まえた解決策を考える。 【検証場面 2】
いかす	⑩ 単元内に会った A さんに、練り上げた解決策を提案して、フィードバックをもらい、これからどのように社会と関わっていくか記述する。	⑩ 単元内に会った B さんに、練り上げた解決策を提案して、フィードバックをもらい、これからどのように社会と関わっていくか記述する。

4 児童の実態調査

単元「国の仕組みと選挙」の「つかむ」段階において、社会課題を自分事として捉えることができているか、振り返りの記述内容から調査する。また、「まとめる」段階において、対話を通して社会課題の解決策を考えることで、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げることができているか、解決策とその理由の記述内容から調査する。

5 授業研究を通して明らかにしたいこと

- (1) 「つかむ」段階において、様々な立場の人に起こりうる影響を明確にすることは、社会課題を自分事とする上で有効か、振り返りの記述内容からつかむ。
- (2) 「まとめる」段階において、対話を通して自分の解決策を吟味することは、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げる上で有効か、解決策とその理由の記述内容からつかむ。

Ⅲ 年間の研究計画

月	研究・調査・授業研究等
4	○ 実態調査を行う。
5	○ 研究主題の基本的な考え方を基に研究の方向性を定め、研究計画書を作成する。 ○ 第1次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。 ○ 長期研修の日程を作成する。
6	○ 第1次授業研究単元「市民の願いを実現する政治 - 弥富相生山線はどうするとよいのか -」 【検証点1】 「つかむ」段階において、様々な立場の人に起こりうる影響を明確にすることは、社会課題を自分事とする上で有効か、振り返りの記述内容からつかむ。 【検証点2】 「まとめる」段階において、対話を通して自分の解決策を吟味することは、複数の立場を踏まえた多角的な解決策を練り上げる上で有効か、解決策とその理由の記述内容からつかむ。
7	○ 第1次授業研究を分析し、基本的な考えを修正する。 ○ 中間のまとめを作成し、今後の研究の方向性を明らかにする。
8	○ 長期研修（A日程）研究先進校や先進研究者を訪問し、研究を深める。 ・筑波大学 唐木 清志氏 ・愛媛大学 井上 昌善氏 ・東北学院大学 佐藤 正寿氏 ・白百合女子大学 中田 正弘氏 ・筑波大学附属小学校 由井 蘭 健氏 ○ 第2次授業研究の授業研究計画書を作成し、検討する。
9	○ 第2次授業研究単元「日本とつながりの深い国々 - アジア・アジアパラ競技大会を通じて -」
10	長期研修で学んだことを基に授業改善し、【検証点1】【検証点2】を検証する。
11	○ 第1・2次授業研究の成果や課題、長期研修の成果や今後の研究の課題などを明らかにし、最
12	終報告書を作成する。
1	○ 「社会参画する力を養う社会科学習」について、1年間の成果や課題をまとめ、発表する。
2	○ 1年間の研究を反省し、今後の研究の方向付けをする。
3	

参考・引用文献 唐木清志『社会科の「問題解決的な学習」とは何か』東洋館出版（2023）

唐木清志「社会科教育 4月号 pp.112 - 113」明治図書（2026）